



みのる法律事務所便り

第375号

令和3年7月

みのる法律事務所
 弁護士 千田 實
 〒021-0853
 岩手県一関市字相去57番地5
 TEL：0191-23-8960
 FAX：0191-23-8950



い な べ ん だ べ ん く 田舎弁護士の駄弁句

(97)

うきよ
浮世をば

たの っ
しみ尽くせ
りこんそうぞく
離婚相続

やまい
病まで
たの どうく
楽しむ道具



令和3年6月21日
あがてらうきよのすて
青空浮世乃捨

人工透析治療導入を延ばすために食事療法をしました。『食事療法を詠む』(2012年5月30日/エムジェエム発行)の中で、「浮世をば 楽しみ尽くせ 病まで」と詠みました。逆戻りはできない高齢者へと進み、回復の可能性のない病を持つに至り、年を取ることも、病を持つことも、楽しむ気持ちで生きなければ人生を楽しく送ることはできないと気が付いたのです。

令和3年に入り『楽しく生きるための相続』と『楽しく生きるための離婚』という本を書き始めました。病気まで人生を楽しむアイテム(道具)にするのですから、「相続問題や離婚問題だって、楽しく生きるためのアイテムにできる」という考え方を語りたいのです。

「そんなことができるのか!？」という疑いも湧くでしょうが、気持ち次第でできます。それは「バックに入っているギアを前進ギアに入れ替えるだけでよい」のです。

相続問題でも離婚問題でも、過ぎたことには拘らず、これから先はどうしたら自分も、相手も、周りの人も皆、幸せになれるのかという、関係者皆の幸福を考えればよいのです。悩みの多い相続問題と離婚問題さえも前向きに楽しく生きるための道具となるのです。

いなべん だべんく
田舎弁護士の駄弁句 ⑨⑧

せいじん よう どうざい と
聖人は 洋の東西 問わずいる
それより染みる 人夫の一言



令和3年6月21日
青空浮世乃捨

死後の世界が分かりません。宇宙の果てが分かりません。時間がいつ始まり、いつ終わるのか分かりません。答えを求め、釈迦、孔子、ソクラテス、キリスト、マホメットなどの世界の聖人の教えを読みました。答えは見付けられませんでした。

「人生不可解」と華厳の滝に飛び込んだ16歳の藤村操少年の心情に近く、生まれて来たことを恨んでいました。

大学4年の秋アルバイト先で、人夫のおじさんが「今日一日、妻や子にどうやって餌を運ぶかで精一杯だ。死んだ先も、宇宙の果ても、時間のことも考える余裕などない。そんな余裕のある人が羨ましい」と茶飲み話で遠慮気味に話しました。「そうだ!!これが生きることだ」と心に染みしました。

この人夫のおじさんの一言が『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という『いなべんの哲学』のもととなったのです。

私にとっては、世界中のあらゆる聖人の教え以上に、名前も知らないおじさんの言葉が身に染みしました。そこから私の生き方は、「いま」に集中するようになりました。

あの钣金工のオジさんの一言をいなべんの短編集第4話として書きました。同封します。お時間がありましたら斜め読みでもして戴ければ幸甚です。

何故、離婚が多いのでしょうか。

一釈迦の無常観とダーウィンの進化論



『楽しく生きるための相続』を脱稿し、『楽しく生きるための離婚』を書こうと思ひ資料を見ていましたら、『何故、離婚するのでしょうか一釈迦の無常観とダーウィンの進化論』という面白そうな話を見付けました。

当事務所の事務長と、出版担当と、私の3人で離婚に関する話をした時の会話を録音したテープを反訳したものです。転載します。「馬鹿臭い話をしているものだ。」と笑いながら暇潰しに目を通して戴ければ幸甚です。近いうちにこの話の内容も文中の一部として『楽しく生きるための離婚』という本を出す予定ですが、その予告を兼ねて紹介します。

千葉美智事務長

赤の他人が長く夫婦を続けていくことの難しさは、時代を超えて日本だけでなく諸外国でも離婚率が極めて高いという統計を示されて、改めて認識しました。

神前や、仏前や、キリストの前で永遠の愛を誓ったのに、どうしてこんなに離婚する夫婦が多いのでしょうか。

中館知子出版担当

先生は以前「釈迦の『無常観』とダーウィンの『進化論』によって、離婚が多い理由は説明できるのではないかと仰っていました。もう一度教えて下さい。

いなべん

あれはその時の思いつきを言っただけで、何の根拠もない。深い考えもない。何かを調べたわけでもない。そのようなことを言っている人がいるということも聞いたこともない。その時の私の思いつきに過ぎない。わざわざ説明するような話ではない。

判決書だと「弁護人の独自の見解で、取るに足らない」と書かれてしまうレベルの話だ。

千葉

私は聞いていません。どんな話だったのですか。

中館

離婚する理由は、釈迦が説いた「何事も絶えず変化する」という『無常観』と、チャールズ・ロバート・ダーウィン（1809-1882）が提唱した「生き残ることができるのは、強い者でも賢い者でもない。環境に応じて変化できる者である」という『進化論』で説明できる、というお話だったように覚えています。

いなべん

あの時は哲学の本を書いている時で、釈迦やダーウィンが頭に浮かんで、思いついたことを中館さんに言った。だが、改めてそう言われると「そうかも知れない」などと思えてくる。

私は生来、お調子者だからね。軽はずみで調子に乗りやすい。おっちょこちょいということだ。でも、改めて考えると「そうかも知れない」という気になってきた。

千葉

いい機会ですから、どういう話なのか、もう少し詳しく教えて下さい。

いなべん

「何事も変わらないものはない」という仏教の『無常観』と、「生き残ることができるのは、変化に対応できる者である」という『進化論』は、離婚問題にも当てはまるのではないかという話だ。

夫婦の関係だって変化する。その変化に対応できないから夫婦関係が上手くいなくなる。その結果離婚問題となるのではないだろうかというだけの話だ。

細くて可愛かった妻も、太くなり見苦しくなる。格好のいい青年だった夫も、中年太りし、髪も薄くなる。これは肉体的な変化だ。これは誰だって避けられない。

子供ができ、子育てのために夫は稼がなければならず、妻や家庭よりも仕事に追われる。妻は、子供の世話や家事に追われ、身だしなみや夫に構ってられなくなる。これは「環境の変化」だ。これも避けられない。

興味津々しんしんだった相手にも、その人とのセックスにも飽あきてくる。目新しい相手に興味が湧いてくる。これは心の変化だ。何だって変わるのだから、神の前で誓った心だって変わる。

肉体が変化し、環境が変化し、心が変化したらそれに応じて夫婦関係もその時々に合わせて上手に変化させ、対応できなければ、どんなに神様の前で永遠の愛を誓ってもやっていけなくなり、その結果離婚に至るのではないか、という話だ。

千葉

確かに、肉体も環境も心も変わらないものはありませんよね。夫婦関係も、その時々の変化に応じて上手に関係を築いていかなければやっていけません。変化に応じて進化しなければならない、ということです。離婚の原因を『無常観』と『進化論』で説明するという話は面白いですね。なるほどですね。

中館

肉体も環境も心も、結婚当初のまま変わらずに永遠に持続するなどということは幻影げんえいというか、幻まぼろしかもしれませんね。それをよく知った上で上手に対応しなければならないということです。

『無常観』と『進化論』で離婚原因を語るというのは、先生らしい説明ですね。

いなべん

「この世の全てのものは絶えず移り変わり、永遠に変わらないものは何一つない」という釈迦の『無常観』と、「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き残るのではない。唯一生き残ることができるのは、変化に対応できる者である」というダーウィンの『進化論』は、離婚問題を考える際にも参考になるという気がしたのだ。そんな気がただけで、それが正しいかどうかの裏付けなど全くない。

自分も40年を超える妻との関係を振り返ってみると、色んな事があったが、その都度、その時々局面は合わせながら何とかやって来た気がする。勢いがある時は勢いに乗り、ない時はないなりに何とかやって来た気がする。それは一方だけでは出来ない。夫婦、親子、兄弟皆が協力し合ってやらなければならない。ここまでやってこれたのは妻や子の協力のお陰だ。妻や子に感謝している。

千葉

今日、『楽しく生きるための相続』という哲学の本を脱稿し、続いて『楽しく生きるための離婚』という哲学の本を書くとのことですが、相続を楽しいものとするというのは分かる気もしますが、離婚を楽しいものとするのはできるのでしょうか。これは相当難しい問題のような気もしますが…。

中舘

離婚問題で来所する人は、皆さん落ち込んでいますが、離婚問題を楽しく生きるためのアイテムにすることなどできるのでしょうか。私も事務長さんと同じで心配です。

いなべん

『楽しく生きるための離婚』とは言っても、離婚を^{すす}勧めるものではない。

離婚問題は悩ましい問題であり、関係者皆が辛く苦しい思いをしている。その辛さ、苦しさを少しでも軽くしてやりたいという思いと、離婚問題だって、未来へ向かって、明るく楽しいものにできないだろうか、という考え方の転換を勧めたいと思っている。離婚を勧めるものではない。

千葉

離婚問題を楽しく生きるための方法とするためには、どのような考え方を持ったらいいのでしょうか。

いなべん

具体的な方法論は、別に考えることにして根本的な考え方としては釈迦の無常観と、ダーウィンの進化論を理解して、それを応用すればよいということになるのではないか。

中舘

どういうことですか？

いなべん

まず、夫婦関係だって絶えず変わり続けるものだという認識を共有することが大事だ。自分も変わるし、相手も変わる。夫婦を取り巻く

環境も変わる。それは当たり前のことだ。お互いに結婚当初のルンルン気分ではいられないことを知らなければならない。「あんなに素直だったのに変わった。ガッカリした。」などと思うのは、無常観がないからだ。自分も相手も必ず変わるものだという覚悟が必要だ。

次に、変わったら変わったなりに、変わった状況に合わせてそれに順応していかなければならないということだ。順応とは、環境の変化や刺激に慣れ、それに合うようになることだが、それをしなかったら生き残れないというのがダーウィンの進化論だが、夫婦関係だって同じだ。

千葉

先生の御夫婦間では何かそのようなことを実感されたという印象の強いことはありましたか？

いなべん

いっぱいある。細くてスマートだと思った妻が大きくなってしまったなどということは、互いにあげればキリがないが、一番印象強いのは、自分が大病を繰り返し、10年間も闘病生活を送らねばならなくなり、生活そのものが激変した。その都度、妻はそれなりに対応してくれ、最後は妻の腎臓をもらい生体腎移植手術を受け、そのお陰で弁護士として今も現役生活が出来ているということに尽きる。

中館

先生が糖尿病、高血圧症、慢性腎不全症で薬物療法、食事療法、人工透析治療、生体腎移植手術をしたり、大腸癌除去手術、人工肛門造設手術、閉鎖手術、慢性硬膜下血腫除去手術、大腿骨骨折手術など、入退院を繰り返していたのは、事務長は勿論ですが、私も側で見えて来ましたが、奥様のご苦労は大変だったと思います。よくここまでやったと感動しています。

千葉

私も同感です。奥さんの努力には頭が下がります。私事になりますが、私も産まれて間もない子供を亡くしていますが、その時の夫の思い遣りには今でも感謝しています。

夫婦は、どの夫婦にもそれぞれ変化がありますが、手を取り合い、その変化の局面を乗り越えて行くことに、本当の楽しみがあるような気がします。

いなべん

何事もそうだと思うが、夫婦問題を考える場合には、釈迦の無常観と、ダーウィンの進化論を持ち出したりすると離婚問題も、法律論に止まらないで、哲学の話に変わり格好良くなったような気がする。

だが、本当は相手を思い遣り、周りの人を思い遣るという気持ちの問題であり、哲学などという大袈裟な話ではなく、優しい気持ちを持ちましょう、というだけのことだ。『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という『いなべんの哲学』を実践するだけということになる。

中館

先生はよく「縁」という言葉を使いますが、一緒になるのも、別れるのも「縁」ということになるのでしょうか。

いなべん

その通りだと思う。「死ぬの生きるのと さんざんもめて 三月で別れる奴もありゃ いやだいやだと云いながら 五十年そってる人もいる♪」という歌もある。一緒になるのも、別れるのも「縁」ということになる。釈迦の無常観とダーウィンの進化論で離婚原因を語ってみたが、一緒になったり、別れたりするのは、最後は「縁」があったかなかったかという一言に尽きる。

千葉

釈迦の無常観とダーウィンの進化論で離婚が多い理由を語ってもらいましたが、結論は「一緒になるのも縁、別れるのも縁」と割り切って、離婚も楽しく生きるための道具にした方がよいということになるのでしょうか。

結婚するのも縁、離婚するのも縁、結婚を楽しむだけでなく、離婚も楽しんだ方がよいということになるのでしょうか。

いなべん

さすが事務長。その通りだ。「病気まで楽しんだ方がよい」というのが私の考え方だ。離婚だってウジウジしないで楽しんだ方がいいと思う。

上手くまとめてくれてありがとう。

